

カウンターテーブル

さみしいのなら ここに座って
隣り合わせで いるだけでいい

無理に話す必要もない
しけた話はしないほうがいい

グラスを傾け 思ってることを
お互い気にせず
言いたくなれば言えばいい

大切なことは 何が足りないか
離れたところで 探してみることに
ひとりであるより ふたりの方が
満たされることが わかるときもある

悲しいのなら ここに座って
涙も見ないで 気が楽だから

無理に話す必要もない
君を救えるかわかるはずもない

グラスを傾け 後悔したこと
聞くだけ聞くから
気が済むまでに言えばいい

大切なことは 辛かったことを
言葉に文字にして 確認すること
ひとごとのように してしまうことで
気持ちが楽に なれるときもある

グラスを傾け とりとめのないこと
お互い気にせず
言いたくなれば言えばいい

大切なことは 自分自身を
離れたところで 見つめてみることに
ひとりであるより ふたりの方が
気づかないことが わかるときもある

数え年

生まれた時が1歳で みんな違う日だけど
正月が来るたび
みんな同じ日から歳が変わる

だから祝い合う 特別な気持ちで
人それぞれでも 新たな歳を迎え

願いを込めて両手を合わせ
ハッピーニューイヤーズソング
寂しい人にも届けようさあ
ハッピーニューイヤーズソング
生きてることは誰でも同じ
ハッピーニューイヤーズソング

日本の「数え年」
いったい誰が決めたのだろう
どんな人でもどこにいても
誰とも身分も変わりなく

争いもやめよう せめて今日だけは
できることならば そのままでいきたいね

無事を祈って両手を合わせ
ハッピーニューイヤーズソング
つらい人にも届けようさあ
ハッピーニューイヤーズソング
生きてることは誰でも同じ
ハッピーニューイヤーズソング

命にゼロはない 全て1から始まる
大切なことは みんな同じであること

願いを込めて両手を合わせ
ハッピーニューイヤーズソング
寂しい人にも届けようさあ
ハッピーニューイヤーズソング
無事を祈って両手を合わせ
ハッピーニューイヤーズソング
つらい人にも届けようさあ
ハッピーニューイヤーズソング
生きてることは誰でも同じ
ハッピーニューイヤーズソング
どんな人にも届けようさあ
ハッピーニューイヤーズソング

白と黒の灯台

陸の果ての灯台にすぎる思いを込めて
やってきた日は海の色も
黒く静まっていた
曇った空に見えにくくなる
消えている光源に
なくしたものを探すように
目を凝らすだけだった

雨も降らずに湿ったままの
薄暗い午後の中
いっそのまま耐えれぬほどの
どしゃぶりになってほしい

溢れてしまう こみ上げてしまう
抑えられないほど そう 何もかもが

白と黒の特徴のあるストライプの灯台を
今の心をうつしだす
気持ちで見つめていた
空に紛れてわからなくなる
白色に挟まれた
黒い部分が容赦なく
胸に押し寄せてくる

ずうっと前に訪れた日は
夏の青い陽射しに
きらめき揺れて
眩しいほどに白と黒が光ってた

戻ってこない あの頃のしあわせ
いたずらなほどに 思い起こさせる

崖の下には声も立てず低く飛ぶ海鳥が
打ち寄せてきたしぶきに混じり
やがて見えなくなってた

戻ってこない あの頃のしあわせ
いたずらなほどに 思い起こさせる

溢れてしまう こみ上げてしまう
抑えられないほど そう 何もかもが

人生

とおいとおい昔の
僕が生まれてないころ
そんな時の思い出が
今わかるだろうか

人間は生まれかわる
きっとそうなんだ
何度も生まれかわる
そうにちがいない

どうせまた生まれるのなら
今の人生のうちに
つまずきころび傷ついて
失敗もいいじゃないか

人間は生まれかわる
きっとそうなんだ
何度も生まれかわる
そうにちがいない

かりわたし

北のはずれの内地に
雁渡し吹く頃
ロシアから渡ってく
るマガンの群れたち

ねぐら求めて北風にのり
天敵から身を守るこの水辺に
タンチョウ コウノトリと
一緒になったね
およそ一年ぶりになるかな

地響きのような鳴き声
いっせいに飛び立ち
いくつものへの字を描いて
夕暮れの中に

百羽のマガンが身を寄せ合う
つかの間のすみか冬期湛水
冷たい雪が降ってもかまわない
土に守られた憩いのひととき

市街で見られない里山
淡い黒に霞んで見える
田んぼや畑のあとの向こう
帯のように連なって広がる

たまに軽トラみつけるだけで
人の姿は見かけることもない

冬のすみか住みなれぬままに
別れが訪れ
日本を離れていく
マガンの群れたち

ふるさと求めて南風にのり
新しい家族増やすために
日本での食事美味しかたかな
水辺で羽を休められたかな

地響きのような鳴き声
いっせいに飛び立ち
一面マダラのように
青空に溶け込み

6万のマガンが次々飛び立つ
数千キロ北の極東の国へ
冷たい風が吹いてもかまわない
生まれたところにかなうものはない

遠くまで見られる里山
淡い紺に霞んで見える
わずかに残る緑の向こう
少しゆらめいて見える

たまにエンジン聞こえるだけで
人の気配は感じることもない

あふれるほどに

あふれるほどに響くメロディ
今日も眠りから覚める前に
ずいぶん昔を思い出して
今の気持ちに変える

忘れていたあの頃
一枚の画像でよみがえる
つたない言葉を並べ思いを紡いでゆく

昨日までは何も
考えていなかったものが
ゆっくりめぐらすことで
かけがえのないものに

でも今はこうすることしかできない
せめてノートにしたためてみよう
手のひらの隙間にこぼれていくよ
大事な思いが消えるのが怖い

抑えられない感情
一編の記載でよみがえる
覚えのある節を添え心にとどめていく

昨日までは少しも
感じていなかったものが
ゆっくりめぐらすことで
かけがえのないものに

でも今はこうすることしかできない
せめて五線譜にしたためてみよう
手のひらの隙間にこぼれていくよ
一瞬のきらめきが消えるのが怖い

あふれるほどに響くメロディ
今日も眠りから覚める前に
ずいぶん昔を思い出して
今の気持ちに変える

曇ったままの頭の中を
ひとすじの光がさすように
ありふれた繰り返しの中で
むくわれてゆくようだ